

■本書の特色

- ① 古文の基礎がためをねらった入門用テキストです。
- ② 今後の古文学習のために入門期に必ずおさえておくべき事項を各講座で一つずつとりあげ、集中的に学習できるように単元構成になっています。
- ③ 各講座とも、前半の二ページで「ポイント」を確認し、後半の二ページの練習問題で定着させるといふ学習の流れになっています。
- ④ 最後の二講座の総合演習で、このテキストで学習した事項のまとめができます。

目次

第1講座	古語と現代語の違い	2
第2講座	動詞・形容詞・形容動詞の用法	6
第3講座	助動詞の用法	10
第4講座	助詞の用法	14
第5講座	敬語の用法	18
第6講座	古文の特色	22
第7講座	いろいろな修辭法	26
第8講座	古典の常識	30
第9講座	総合演習(1)	34
第10講座	総合演習(2)	38

第5 講座

敬語の用法

◎古文では、数多くの敬語が複雑に用いられている。主語や目的語など、主要な文の成分が省略されていても、文脈がつかめるのは、この敬語の使い分けによるとも言える。つまり、敬語を理解しなくては、古文を正しく読みくだせないのだから、その見分け方を中心に、しっかりマスターしよう。

ポイント1

敬語には、**尊敬・謙讓・丁寧**の三種類がある。尊敬は聞き手や話の中の人物の動作・事柄を直接敬っていくもので、謙讓は話し手や話の中の人物の動作・事柄をへりくだった言葉で表すことによりその動作の対象を敬う言い方である。丁寧は話し手が聞き手に対して言葉を丁寧にして注意を表すもので、これは「侍り」と「候ふ」だけである。

尊敬と謙讓を区別するには、ここに相手と自分がいると仮定して考え、その訳語が相手の動作に使われる場合は尊敬、自分についてのものであるときは謙讓とする。

1 次の——線部について、その性質を説明しているものをあとから選び、記号で答えよ。

- (1) 口惜しの花の契りや。一ふさ折りて参れ。(源氏物語)
- (2) 高名のなながしと言ひし御馬、いみじかりし悪馬なり。あはれ、それをたてまつりしづめたまへりしはや。(大鏡)

- (3) むつまじき四五人ばかりして、まだ暁におはす。(源氏物語)
- (4) 今日なむ、天竺へ石の鉢とりにかる。(竹取物語)
- (5) うぐひすは、(中略)九重のうちに鳴かぬぞいとわろき。(中略)十年ばかりさぶらひて聞きしに、まことにさらに音せざりき。(枕草子)

ア 動詞で「与ふ」の意の謙讓語。

イ 動詞で「行く」の意の謙讓語。

ウ 動詞で「居り」の意の謙讓語。

エ 動詞で「乗る」の意の尊敬語。

オ 動詞で「行く」の意の尊敬語。

- (1) () (2) () (3) () (4) () (5) ()

ポイント2

敬語の中には、同じ語が尊敬と謙讓の両方に用いられるものがある。しかもこれらの語は、たいへん重要なものだから、暗記してしまおう。

① **奉る** 「さし上げる」の意の謙讓語であるが、「着る・乗る・食ふ・飲む」の意のときは尊敬語。

② **参る** 「飲む・食ふ」「する」の意に用いられるときは尊敬語。「与ふ」「行く」の意のときは謙讓語。

③ **たまふ** 四段活用をして尊敬の意の補助動詞であるが、下二段活用をして、会話や手紙の中で謙讓の意に用いられる。

2 次の——線①～⑤の敬語の種類を書け。

- (1) 御乳母などつかはしつづつ、ありさまを聞こし召す。(源氏物語)
- (2) いかなる所にか、この木はさぶらひけむ。(竹取物語)
- (3) 清げなる御直衣たてまつりて、ひとつ御車にたてまつる。(宇津保物語)

(4) 「女房やさぶらひたまふ」と口々して言へば……。(枕草子)

- ① () () () () () () () ()
- ② () () () () () () () ()
- ③ () () () () () () () ()
- ④ () () () () () () () ()
- ⑤ () () () () () () () ()
- ⑥ () () () () () () () ()
- ⑦ () () () () () () () ()

3 次の——線①～⑦を口語訳せよ。

(1) 正月に^①拝み奉らむとて小野にまうでたるに、比叡の山のふもと
なれば雪いと高し。しひて御室にまうでて^②拝み奉るに、つれづれ
といとも悲しくて^③おはしましければ、やや久しくさぶらひて、
古のことなど思ひ出で^④聞えけり。(伊勢物語)

(2) 内へ参りたまふとて、御車に奉りたまひければ、わが御身は乗
りたまひけれど、御髪のすそは、母屋の柱のもとにぞおはしける。
(大鏡)

- ① () () () () () () () ()
- ② () () () () () () () ()
- ③ () () () () () () () ()
- ④ () () () () () () () ()
- ⑤ () () () () () () () ()
- ⑥ () () () () () () () ()
- ⑦ () () () () () () () ()

ポイント3

補助動詞とは、動詞が本来の意味を失って、上の文節の叙述を助けたり、上の語に敬意を添えたりする助動詞のようにはたらくをするものをいうが、これにも、その一部を前述したように、敬語として用いられるものがある。

- ① 尊敬 たまふ(四段)・おはす・おはします・ます
- ② 謙讓 奉る・参らす・申す・聞こゆ・たまふ(下二段)
- ③ 丁寧 侍り・候ふ・さぶらふ

4 次の——線①～⑦の敬語の用法をあとのア～ウから選び、また、

だれのだれに対する敬意を示したものをか a～f の記号で答えよ。

(尼君) 生ひたたむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむ
空なき

また、みたる大人、「げに」とうち泣きて、

① はつ草の生ひゆく末も知らぬまにかでか露の消えむとすらむ
と聞ゆるほどに、僧都あなたより来て、「こなたはあらはにや侍ら
む。この上の聖の方に、源氏の中将の、わらはやまじなひにも
したまひけるを、ただ今なむ聞きつけ侍る。いみじう忍びたまひけ
れば、知り侍らで、ここに侍りながら御とぶらひにもまうでざりけ
る」とのたまへば、尼君、「あないみじや。いとあやしきさまを人や
見つらむ」とすだれおろしつ。僧都、「この世にののしりたまふ光
源氏、かかるついでに見奉りたまはむや。」とて立つ音すれば、帰
りたまひぬ。(源氏物語)

ア 尊敬語 イ 謙讓語 ウ 丁寧語

a 姫君 b 尼君 c 大人 d 僧都 e 源氏 f 作者

記号 だれのだれに対する

- ① () () () () () () () ()
- ② () () () () () () () ()
- ③ () () () () () () () ()
- ④ () () () () () () () ()
- ⑤ () () () () () () () ()
- ⑥ () () () () () () () ()
- ⑦ () () () () () () () ()

演習 1 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

中納言なかつなごん顕基あきもと卿は、後一条院ときめかし **A** て、わかくより官位につけて恨みなかりけり。御門みかどにおくれ **B** につければ、「忠臣は二君につかへず」とて、天台たいたい楞嚴院りやうごんいんにのぼりて、かしらおろしてけり。御門かくれ給へりける夜、火をもともさざりければ、「いかに」とたづぬるに、主殿司しゆけんし、新主しんしゆ（後朱雀ごすざく）の御事をつとむとて参らぬよし申しけるに、出家しゆげの心つよくなりにけるとかや。

あなたこなたにておこなはれけるが、大原に住みける比くら、宇治殿、かの庵室いんむろにむかひ給ひて、よもすがら御物語ありけり。宇治殿、「後世ごせはかならずみちびかせ給へ」など示し給ひて、暁あけ帰りなんとし給ひける時、「俊実とゆみは不覚ふかくのものにて候ふ」と申されけり。その時は何とも思ひわかせ給はで、帰かへりて後、しづかに案じ給ふに、させるついでもなきに、子息こしよの事よもあしぎまにいはれ **C**。見はなつまじきよしなりけり。思ひとりて世をのがるといへども、恩愛おんあいはなほすてがたき事なれば、思ひあまりていひ出でられけりと、あはれにおぼして、事ことにふれて芳志よしをいたされければ、大納言おほのくひまでなられにけり。美濃みのの大納言とは、この人の事なり。 （古今著聞集ここんしやくもんしゆ〈巻八・孝行恩愛第十〉）

〔注〕ときめかし——特にひいきにして。 おくれ——後に残り。

かしらおろしてけり——剃髪ていぱつして出家しゆげした。 主殿司——宮中の掃除そうじや火の当番たうばんをする官職名。 よもすがら——一晩中。 不覚

——精神しんじんがすっかりしていないこと。 芳志よしをいたされければ——お気づかい申しあげなされたので。

1 **A**・**B**には、敬語が入る。それぞれ、I 敬語の種類、II 敬語

を次から選び、記号で答えよ。

I ア 尊敬語 イ 謙讓語 ウ 丁寧語

II ア たてまつり イ 候ひ ウ 給ひ

A (. .) B (. .)

2 ——線①「出家の心つよくなりにけるとかや」の理由として最も

適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア 御門の崩御に人の命のはかなさを感じたから。

イ 世間の人々が自分に対して冷たく背を向けたから。

ウ 時勢の移ろいにすばやく反応する人の心に無常を感じたから。

エ 官位の停滞によってのぞみをなくしたから。

3 ——線②「俊実は不覚のものにて候ふ」の話を次から選び、記号を○で囲め。

ア 顕基 イ 宇治殿 ウ 俊実 エ 主殿司

4 ——線③「何とも思ひわかせ給はで」の口語訳として最も適当な

ものを次から選び、記号を○で囲め。

ア 何の思いも湧わいていらつしやらなかつたので。

イ どういうこととおわかりにならないで。

ウ どうする方法もおおりにならないので。

エ どのようなにお慰めしてよいか方法もおおりにならないで。

5 **C**に入れるのに最も適当な助動詞を次から選び、記号を○で

囲め。

ア ず イ けり ウ じ エ ぬ オ まし

6 ——線④「大納言までなられにけり」の主語を次から選び、記号

を○で囲め。

ア 顕基 イ 宇治殿 ウ 俊実 エ 主殿司

演習 2 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

亭子の帝鳥飼の院におはしましにけり。例のごと御遊あり。「このわたりのうかれめどもあまた参りて候ふなかに、声おもしろくよしあるものは侍りや」と問はせ給ふに、うかれめばらの申すやう、「大江の玉淵がむすめといふものなむ、めづらしまりて侍る」と申しければみさせ給ふに、様かたちもきよげなりければ、あはれがりたまうて上にめしあげ給ふ。「そもそもまことか」など問はせ給ふに、鳥飼といふ題を皆人々によませ給ひけり。おほせたまふやう、「玉淵はいとらうありて、歌などよくよみき。この鳥飼といふ題をよくつかうまつりたらむにしたがひて、実の子かとはおもほさむ」とおほせたまひけり。うけたまはりてすなはち、

浅緑かひある春に逢ひぬれば霞ならねどたちのぼりけり
 とよむ時に、帝ののしりあはれがり給ひて、御しほたれ給ふ。人々もよくあひたるほどにて、酔ひ泣きいになくす。帝、御桂一襲・袴たまふ。ありとある上達部・みこたち・四位五位、「これに物ぬぎてとらせざらむ者は座より立ちね」とのたまひければ、かたはしより上下みなかづけたれば、かづきあまりて、二間ばかりつみてぞ置きたりける。かくて帰り給ふとて、南院の七郎君といふ人ありけり、それなむこのうかれめのすむあたりに家つくりてすむときこしめして、それになむのたまひあづけける。「かれが申さむこと院に奏せよ。院よりたまはせん物も、かの七郎君がり遣さむ。すべてかれにわびしきめなみせそ」とおほせたまうければ、常になむとぶらひかへりみける。

(大和物語 一四六段)

〔注〕 鳥飼の院——大阪府三島郡にあった離宮。 御遊——管弦の御遊

宴。うかれめ——遊女。らうありて——才知にたけていて。
 かづく——縁として与える。わびしきめなみせそ——つらい目をさせるではないぞ。

1 〳〵線 a i e のうち、尊敬の助動詞「す」を含まないものを次から選び、記号を○で囲め。

ア a と d イ b と e ウ d と e

エ d のみ オ e のみ

2 〳〵線①「よしあるもの」の意味として最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア 事情のある者 イ 趣味のある者 ウ 張りのある者

エ 由緒のある者 オ 理由のある者

3 〳〵線②「おもほさむ」の敬語の用い方について、正しいものを選択し、記号を○で囲め。

ア 「おもほす」のは帝であるが、話し手は臣下だからこれでよい。

イ 玉淵のむすめに対する敬意を表しているのだからこれでよい。

ウ 話し手は帝であるが、「おもほす」のは上達部たちであるからこれでよい。

エ 帝が自分の動作について尊敬語を用いているが、このような例はほかにはない。

オ 帝が自分の動作について尊敬語を用いているが、これはけつしで異例ではない。

4 〳〵線③「かれ」とはだれか。次から選び、記号を○で囲め。

ア 帝 イ うかれめども ウ 玉淵

エ 玉淵がむすめ オ 七郎君

どんなものを智とかというかと、「可」と「不可」というのも、つまりは「一つのこと」になつてしまふのだ。どんなことを「善」といふべきであらうか。「まことの人」というものは、智もなく、徳もなく、努力の結果もなく、名誉もほしくない人なのだ。だがこの「まことの人」の存在を知り、だがこれを後世に伝えようか。このまことの人には、ことさらに徳を晦まし、愚を装つて、こんな様子をしてみせるのではない。もともと賢愚とか損得とかいう境地に自分を置いていないのである。

迷いの心で名誉利益の欲望を追求してみると、以上のようなことになる。万事はみな実体のない仮の世界である。論ずるに足りないし、願うに値しないものだ。

演習2 1都住みの人(都の人々) 2①オ・ア ②エ・ウ ③オ・イ

【解説】 1 「ゐなか世界の人だに」は、京から遠く離れたいなかの人でさえもこの意。「世界」は「ゐなか」を強めている。 2 ①「なめりな」は、……であるらしいな。②「月日しもこそ世に多かれ」は、何も今日行かなくてもほかに月日はこの世には多くあるのの意。「し」「も」はともに強意。③「かし」は文末にあつて意味を強め、念を押す意。

【口語訳】 その(十一月二十数日に石山寺に参詣した)年の翌年(永承元年)

(の陰曆)十月二十五日、(冷泉天皇御即位後初めての)大嘗会の御禊の盛儀だということで、世間が大騒ぎをしている時に、(私は)初瀬詣でのための精進を始めて、御禊の当日京を出発することにした。すると、私に意見するにふさわしい人々のうち兄弟は、「天皇御一代に一度の御盛儀で、(都の人々は皆見逃せないと思つており、)いなかあたりの人でさえも見にくるというのに、(初瀬詣でのための)月や日はいくらでもあるのに、(よりによつて)その御盛儀の当日に京の都をふり捨てるようにして出発して(初瀬へ)行くのは、ほんとうに気狂いじみたことで、後の世までの話の種になりそうなことだ。」と言つて腹を立てたが、子供たちの父である人(夫Ⅱ橋俊通)は「どうにでもいいよ。あなたの決心しただよ。」といつて、私の言う通りに出発させてくれた。その配慮のほどはしみじみとうれしい。私に随つて同行する人々も、ほんとうに、ひどく見物したがっているのは気の毒だけれども、「見物などして何にならうか。こんな折にわざわざ参詣す

る信心を、なんといつても仏様はきつとお感じくださるでしょう。必ずこの御利益はあるでしょう。」と思ひたつて、その御禊の日の夜明け前に京の都を出発したところ、ちょうどこの日、行列が通る予定のその二条の大路を通つていくと、先頭に灯火を持たせ、供の者が浄衣の物詣で姿で通行するのを、たくさんの人々——棧敷などに行くといふことで行き来する人、牛車で行く人、徒歩の人などが、だれも、「あれはなんだ。あれはなんだ。」とおだやかならぬことのように言つて驚き、あきれて笑い、(中には)あざける人々もいる。良頼の兵衛督と人の申しあげていたお方の家の前を通り過ぎたところ、兵衛督様が棧敷にお移りになるところなのだろう、門を広く押し開けて、人々が門前に立つていたが、「あれは物詣でに行く人であらうよな。(お詣りになら、他に)月も日もたくさんあるのに(よりによつて今日出かけるとは変わった人たちだ。)」と笑うその中に、まあ、なんと思慮深い人だらうか、「(御禊の盛儀を見物するといつて)一時の間目を樂しませたところで、いったい何にならうか(いや何にもなりはしない)。御立派に発心されて(おいでになることだから)、仏様の御利益を必ずお受けになるお方と見受ける。(私たちのしていることはほんとにつまらないことだ)御禊の見物などしないで、この方と同じように発心して物詣でに出かけるべきだったんだなあ。」とまじめにつぶやいている人が一人だけあつた。

第5 講座 敬語の用法

P 18 ~ 21

- 1 (1)ア (2)エ (3)オ (4)イ (5)ウ
- 2 ①尊敬 ②丁寧 ③尊敬 ④尊敬 ⑤謙讓
- 3 ①ご挨拶申しあげよう ②参上したところ ③いらっしゃった ④おそばにお仕えて ⑤思い出してお話し申しあげた ⑥御車にお乗りになったところ ⑦柱のところまでおありだった

- 4 ①イ・f↓b ②ア・d↓e ③ウ・d↓b ④イ・d↓e ⑤イ・d↓e ⑥ア・d↓b ⑦ア・f↓e

【解説】 1 (1)「参る」は、「参上する、さしあげる」などと訳す。(2)「たてまつ

「乗る」の意に用いられるときは尊敬語になる。(3)「おはす」は、「あり」「居り」「来」「行く」の尊敬語。(4)「まかる」は、目上の人のところから引きさがることの意味で、「参る」の反対語として覚えておく。どちらも「行く」「来」の謙讓語。(5)「さぶらふ」は、「あり」「居り」の謙讓語で、おそばにお仕えして、などの意となる。2③直衣を着る、④車に乗るの意。(5)は②の「さぶらふ」との意味の違いを考える。4①「聞ゆる」は「申しあげる」という意味の謙讓語で、「はつ草の」の歌は、「大人」から「尼君」に対して詠まれたものだが、この「聞ゆる」は地の文中にあるのだから、敬意は、「作者」から「尼君」へととなる。②「たまひ」は四段活用の連用形だから、尊敬語となる。ここは、「僧都」の言葉の中にあり、「も」のしたまひける」の主体は源氏だから、敬意は、「僧都」から「源氏」へとということになる。③「侍る」は補助動詞で、上の「なむ」を受けて連体形となっている。もちろん丁寧語で、ここは「僧都」が話し手、「尼君」が聞き手。④「まうで」は「参上する」という意味の謙讓語で、話し手は「僧都」、その動作の受け手は「源氏」だから、敬意は、「僧都」から「源氏」ということになる。⑤「奉り」は補助動詞で謙讓語。見るのは「僧都」であり、その対象は「源氏」であるから、「僧都」から「源氏」への敬意となる。⑥「たまは」は四段活用の未然形だから、尊敬語であるが、ここは、「僧都」が「尼君」に「源氏の君を拝見なさらぬか」と言っているのので、「僧都」から「尼君」への敬意を示したとみる。⑦「たまひ」は四段活用の連用形で、尊敬語。ここは、「源氏」がへお帰りになった」という意味の地の文だから、「作者」から「源氏」への敬意とみる。

【口語訳】

1 (1)心残りのする花の契りだな。一ふさ折ってさし上げる。(2)世間によく知られている何がしという御馬は、たいへん悪馬だった。ああ、それにお乗りになり、思いのままに従わせるとは。(3)ごく親密な人たちが四五人ほど、まだほの暗い時分にいらっしゃる。(4)今日は天竺へ石の鉢をとりについて参ります。(5)うぐいすは、(中略)宮中で鳴かないのはたいへんよくない。(私が)十年ほど(宮中に)お仕えして聞いたところ、ほんとうにまったく(うぐいすの鳴く)声がしなかった。

2 (1)乳母をおつかわしになって、ようすをお聞きになられた。(2)どのよ

うなところに、この木はあるのだろうか。(3)ござっぱりとした直衣を身につけ、牛車にお乗りになる。(4)「女房がいますよ」ととんでに言うところ……。

3 (1)正月に「新年の拝賀を申しあげよう」として、小野に参上したときには、(小野は)比叡の山ろくであったので、雪が高く積もっていた。強引に、(雪を踏み分けて親王の)御庵室に参上して拝顔申しあげると、(親王は)どうしようもないごようすで、とてもさびしげでいらっしゃったので、やや長い時間(親王の前に)伺候して、昔のことなどを思い出してお話し申しあげた。(2)内裏に参内されようとして牛車に乗られたが、お体は乗ったけれども、髪の毛の先は、母屋の柱の根もとのところにありました。

4 尼君がへ生ひたたむ……これから成長して、どう暮らしてゆくかわからぬ若いあなたを残しては、消えてゆく露のようなわが身でも、とても死にきれません。というところ、また、そこにすわっている年輩の女房が、へはつ草の……萌えだしたばかりの若草のような姫君の、成長してゆく将来もわからない間に、どうして露は先に消えようとするのでしょうか。と申しあげているところに、僧都がむこうから来て、「こちらは外からまる見えでしょうよ。この上の聖の僧坊に、源氏の中将が熱病のまじないに来られたことを、いま耳にしました。ひどくお忍びで来られたので、知りませんが、ここにおりながらもお見舞いにも参上しませんでした。」とおっしゃるので、尼君は、「まあたいへん。ほんとうに見苦しい様子を、どなたか見てしまったのかしら。」と言って、すだれをおろしてしまった。僧都は、「世間で評判になっておられる光源氏を、こうした機会に拝見なさいませんか。」と言って、座を立つ音がするので、源氏の君はお帰りになった。

演習 1

1 Aア・ウ Bイ・ア 2ウ 3ア 4イ 5ウ 6ウ

【解説】 1 Aは、後一条院が寵愛なされたのである。Bは顕基が死におくれ申したのである。動作の対象(受け手)が「御門」である点に注意。

2 主殿司が早くも新しいご主人の「御事をつとむ」という事実を押さえて考える。3 宇治殿が、出家した顕基を訪問した帰りぎわの場面である。「俊実」は「顕基」の「子息」。4 「思ひわか」は「思ひ分か」で、分別するの意。

5 「我が子のことを、まさか悪くおっしゃるはずもあるまい」の意である

ことを理解する。6 だが、だれに、だれのことを頼んだか、そしてどうなったか、と考えてみよう。

【口語訳】 中納言顕基卿は、後一条院がご寵愛なされて、若いころから官位につけて（もらい）不満に思うところがなかった。その帝に死に遅れ申したので、「忠義な臣は二人の主君に仕えない」として、天台楞嚴院にのぼって、剃髪出家した。帝がお亡くなりになった夜、（ご身辺に）火もとまさないでいたので、「どうしたのか」とたずねると、主殿司が、新帝（後朱雀）のおつとめをするので参上致しませんということをお申しあげたところ、出家の気持ちが強くなったかということである。

あちこちで仏道修行をされたが、大原に住んでいたころ、宇治殿（藤原頼通）が、その庵室にお出かけになって、夜通しお話をされた。宇治殿は「私の死後の道を必ずお導きください」などとおっしゃって、明け方にお帰りになろうとした時、「（わが子の）俊実はふつつか者でございます」と申された。（宇治殿は）その時はどういう意味がよくわかりにならないで、帰ってから、静かにお考えになってみると、これという理由もないのに、子息のことをまさか悪いようには言われまい。見捨てることができないうというわけだったのだなあ。心にこうと思いついて遍世はしたものの、親子の愛情のきずなはやはり捨てにくいことなので、思いあまって言葉に出されたのだと、あわれ深くお思いになって、何事につけてもお気づかい申しあげたので、（俊実は）大納言までおなりになった。美濃の大納言とは、この人のことである。

演習 2 1ウ 2エ 3オ 4エ

【解説】 1 「す・さす」が尊敬の意になる場合は、尊敬の補助動詞・助動詞を伴って「せ給ふ」「させ給ふ」「せらる」「させらる」などの形になるときに限る。「せ給ふ」「させ給ふ」の「せ・させ」が使役の意になる場合は、使役の対象が確定できるときとすればよい。なお、動詞の語尾にも注意。

2 「よしあり」は「由あり」で、由緒がある、風情があるの意がある。

3 天皇・上皇などの言葉にみられる自敬敬語。これは、天皇や上皇が実際にそう言われたのではなく、それを引用するときに、作者の敬意が入りこんだものである、という説が有力である。

【口語訳】 亭子の帝が鳥飼の院にいらっしゃった。いつものように（管弦の）御遊宴が催される。（帝が）「このあたりの遊女たちが大勢参上して伺候しているなかに、声の美しく由緒のある者は何候しているか」とお尋ねになると、遊女たちが申し上げるには、「大江の玉淵のむすめという者が珍しく参上しております」と申し上げたので（帝が）ご覧になると、姿・容貌もござっぱりとして美しかったので、深く心をおひかれになって（むすめを）殿上にお呼び上げになる。「いったい（玉淵のむすめであるというの）は）本当か」などとお尋ねになったが、（ちょうどそのとき）鳥飼という題で皆の人々に（歌を）お詠ませになった。（そこで帝の）仰せになるには、「玉淵はたいそう才知にたけていて、歌なども上手に詠んだ。この鳥飼という題を上手に詠み申し上げたとしたら、（玉淵の）ほんとうの子だと思いいなろう」と仰せになった。（帝の命を）お受けしてすぐに、（女は）

生きがいのある春にめぐりあったので、（私は）浅緑にかすむ春霞ではありませんが、卑しい身分なのに、私は御殿の上に乗上いたしましたことです。

と詠むときに、帝は声をあげて心からおほめになって、御落涙になる。（おそばの）人々もよく酔っているときで、（感心のあまり）酔い泣きをたいそうこのうえもなくする。帝は、御柱一襲と袴を（玉淵のむすめに）お与えになる。すべての上達部・親王たち・四位五位に、（帝は）「このむすめに着物を脱いで与えないような者は、席から立ってしまえ」と仰せになるので、かたはしから上下（の人々が）皆（衣服を）かけ与えたので、ただだきすぎて（衣服を柱の間）二間ほど積み重ねておいたのであった。このようにして（帝は）お帰りになろうとして、南院の七郎君という人がいた、その人がこの遊女の住んでいるあたりに家を建てて住んでいるとお聞きになって、その人にむすめを預って世話をするように仰せられた。「むすめの申し上げるようなことを院（わたし）に奏上せよ。院よりお与えになる物も、あの七郎君のもとへ遣わそう。万事、女につらい目をさせるではないぞ」と仰せになったので、（七郎君は）常に（むすめを）訪れて世話をしたのであった。